

# いぐさ新品種「瀬戸1号」について

中野善雄, 松沢正知, 定平正吉, 浜田四郎

## 1 結 言

戦時中のいぐさの作付制限等による栽培面積の極端な減少は、戦後において既存の品種の消滅、不純をもたらし、早急に新品種の育成が望まれた。当時の豊表の製織は手織が盛んな時代で、多収よりも備後表という銘柄が重んぜられた時代であった。本品種は昭和15年に広島農試千年藺草分場において育成された広島6号をもとにして、手織用に更に改良し育成されたもので、育成当時の広島県における主力品種となった。現在でも品質優良なため広島県では栽培が続けられているので、育成の経過及び特性の概要を報告する。

## 2 来歴及び育成経過

昭和22年12月農林省西条農事改良実験所瀬戸試験地(昭和26年より広島県立農業試験場東支場と改称)において、広島県沼隈郡千年村(現在沼隈町)で保存栽培をしていた広島6号を取寄せ、栄養系分離法により選抜育成したもので、昭和23年畑苗床における系統選抜試験、昭和24年、25年に本田系統選抜試験、昭和26年生産力検定予備試験、昭和27年生産力検定試験を行ない、同年12月「瀬戸1号」の系統名が附され、昭和28年特性検定試験を行なって成績優良と認められ、昭和29年「瀬戸1号」を品種名として広島県奨励品種に採用された。

育成経過の概要はつぎのとおりである。

年 次	昭23	昭24	昭25	昭26	昭27	昭28		昭29
試 験 名	系統選抜	系統選抜	系統選抜	生検予備	生 検	生 検	特 検	特 検
供試系統数	350	133	47	12	5	2	2	3
選抜系統数	133	47	12	5	3	2	2	3

(注) 生検予備は生産力検定予備試験、生検は生産力検定試験、特検は特性検定試験

## 3 特 性

生育型は分げつ型に属し、広島6号に比べ伸長、分げつ共に同程度であるが、収量は多い。着花は極めて少なく、茎の太さは広島6号よりやや太い傾向があるが中細種に属する。色沢、粒揃共に優良で製織した場合美麗である。排水不良田等では春季欠株を生ずることがあり、概して不良環境に弱い欠点がある。

## 4 適地及び栽培上の注意

本州中部以南の温暖肥沃地帯、手織地帯に適する。

本品種は密植すると茎が細くなり、倒伏しやすく、また早期の窒素多施も茎が軟弱となって倒れ易い。疎植すると伸長が劣り、一般に15~18cm正方形が適当である。

## 5 試 験 成 績

品 種 名	年 次	葎長 (cm)	1株 当数 (本)	収 量 (kg/a)		収量指数		1株 当花 序数	色 沢	粒 揃	茎 の 太 さ
				乾葎重	長い重	乾葎重	長い重				
瀬戸1号	昭26	127	103	119.6	51.4	100	104	0.0	—	—	—
	27	144	110	135.4	90.4	113	118	0.0	良	良	中細
	28	140	110	130.5	97.1	102	104	2.2	良	やや良	—
	29	138	127	129.4	95.6	103	102	0.2	良	良	—
	平均	141	116	131.8	94.4	106	107	0.8	良	良	中細
広島6号 (比較)	26	127	97	120.0	49.5	100	100	0.1	—	—	—
	27	140	115	119.6	76.5	100	100	0.0	良	やや良	中細
	28	140	114	127.9	93.4	100	100	3.6	良	やや良	—
	29	137	130	126.0	94.1	100	100	0.1	やや良	良	—
	平均	139	120	124.5	88.0	100	100	1.2	良	やや良	中細
岡山3号 (比較)	26	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	27	144	108	137.3	97.5	115	127	0.0	やや不良	不良	太
	28	143	107	132.8	103.1	104	110	2.5	中	不良	—
	29	142	119	125.6	97.9	100	104	0.2	良	やや良	—
	平均	143	111	131.9	99.5	106	113	0.9	中	不良	太

(注) 平均は昭27, 28, 29年3カ年平均。

## 6 育 成 従 事 者

年 次	試 験 場 所	育 成 従 事 者			
昭22	農林省西条農事改良実験所瀬戸試験地	中野善雄	三谷数美		
23		〃	〃	佐藤文昭	
24		〃	〃	〃	定平正吉
25		〃	松沢正知	浜田四郎	
26		広島農試東部支場	〃	〃	〃
27	〃		〃	〃	定平正吉
28	〃		定平正吉		
29	〃		〃		

Summary

Characteristics of a New Variety of Mat Rush Grass

“Seto No. 1”

Yoshio NAKANO, Masatomo MATSUZAWA,

Masayoshi SADAHIRA and Shiro HAMADA

A new variety “Seto No. 1” was bred up originally from a former variety “Hiroshima No. 6” by the method of clone separation in 1952, and designated as one of the suitable varieties encouraged in Hiroshima Prefecture. Actually we can not observe so much difference in the characteristics of plant between this variety and “Hiroshima No. 6”, but the yield is higher than the latter.

As this variety bears very few flowers and produces slender stems, it is preferred to weave fine Tatami-facing.

This variety is suitable to be cultivated in the fertile soil under the mild climate. But one of the most serious trouble is to be affected by lodging owing to the weakness of stems, when it is grown in close density and too-much amount of nitrogen fertilizers is applied.

